

Error Analysis of “no” Noun Modification by Chinese Students of Japanese

Yukiko Muramatsu

This paper examines the influence of the Chinese language on the use of “no” noun modifiers by Chinese students of Japanese. “De” in Chinese and “no” modifiers in Japanese are alike grammatically; but they also differ in some ways, and it is said that Chinese students of Japanese are apt to make errors due to these differences.

This paper examines the errors that Chinese students made in presentations in advanced Japanese classes, and makes clear how the influence of the Chinese language appears in errors of “no” modification. In addition, this study shows that there are obviously individual differences, and that most errors involved the use of na-adjectives.

中国人日本語学習者にとっての「の」の問題点

——連体修飾の場合——

村 松 由起子

1. はじめに

日本語の「の」と中国語の「的」は用法上よく似ていると言われる。しかし、「の」と「的」の用法を比較してみると実際にはいくつか異なる点もあり、その違いを明らかにした先行研究もある。

この「の」と「的」の類似性が、却ってその違いを見落としやすくしているため、中国人日本語学習者には「の」に関する誤用がよく見られると思われがちだが、果たして実際に誤用が多いのであろうか。誤用を調査し、母語の影響との関連を確かめてみる必要がある。日本語と学習者の母語との間に一見誤用を導きやすそうな相違点があったとしても、それが学習者にとって習得しやすい文法項目であれば誤用は少ないはずである。学習者の母語の影響がそのまま誤用に反映されるとは限らないのではなかろうか。

本稿ではこの「の」と「的」について、日本語と中国語の用法上の相違点を踏まえた上で、実際に観察された中国人学習者の誤用傾向を分析し、「の」・「的」の相違点と学習者の誤用との関連性を明らかにしたい。ただし、「の」・「的」の相違点と学習者の誤用との関連性が見られたからといって、即、誤用が母語の影響によるものだと断定することはできない。他の要因で生じた誤用がたまたま「の」・「的」の相違点と重なった可能性も捨て切れない。特に「の」については、日本人の幼児が日本語を第一言語として習得する場合にも誤用が現れることがすでに報告されていることから、中国人学習者の場合でも母語以外の要因が関与している可能性もある。それでも、いくつかある相違点についてのみ誤用が多数観察され、且つその他の点ではあまり誤用が現れない場合には母語が影響している可能性が高いと言えるであろう。

また、母語と誤用の関連性が明らかになれば、教師としては学習者に対してより効果的な指導も行えるはずである。教師は「の」を導入する場合、どの程度中国語の影響を考慮したらよいのだろうか。本稿では教師が連体修飾の「の」を指導する際に考慮すべき点についても検討してみたい。

2. 日本語の「の」

まず、日本語の「の」の用法についてまとめておく。ここでは姫野（1993）の説明を利用させていただく。以下の1から7は姫野による。

- 1 私の傘 母への贈り物（名詞の修飾 いわゆる格助詞）
- 2 私の持っている傘（連体修飾節の主格・対象格 格助詞）
- 3 （傘の中で）私のは赤い（代名詞的用法 準体助詞）
- 4 泥棒が逃げるのを見た（従属節の名詞化 準体助詞）
- 5 山があるから登るのだ（説明判断の文末表現 準体助詞）
- 6 行くの行かないのとうるさい（列挙 並立助詞）
- 7 これでいいの（断定 終助詞）

この7つの用法のうち、本稿では1の名詞の修飾について扱っていくことにする。1を扱う理由は、「の」と「的」を対照させた場合、1の用法は「的」と類似している一方、若干の相違点もあり、中国人学習者の誤用と最も関わりが深い用法だと考えるからである。以下、1の用法に限って見ていくことにする。

日本語の連体修飾の構造には「名詞＋名詞」「名詞＋の＋名詞」「形容詞＋名詞」「形容動詞＋名詞」「動詞＋名詞」がある。このうち「形容詞＋名詞」については形容詞と名詞の間に「の」を挿入してしまう「形容詞＋の＋名詞」を用いる誤用が、日本人の幼児から外国人日本語学習者まで幅広く観察されることが報告されている。その報告例としてここでは白畑（1993）を挙げておく。白畑は「形容詞＋の＋名詞」構造を「ノ」の過剰生成と呼び、韓国人の幼児が日本語を第二言語として習得する過程で観察される「ノ」の過剰生成について報告している。白畑によると、この幼児の場合、「名詞＋名詞」構造の発話が観察されたのと同時期から「形容詞＋の＋名詞」構造が観察され、それから2ヶ月後に「形容詞＋名詞」構造が出現したという。次の(1)(2)(3)はこの幼児の発話である。

- (1) しろいのめがね（4歳5ヶ月10日；滞在4ヶ月14日）
- (2) しろいのつみき（4歳6ヶ月3日；滞在5ヶ月7日）
- (3) たかいのやま（4歳6ヶ月17日；滞在5ヶ月21日）

その後、さらに2ヶ月間の「形容詞＋の＋名詞」と「形容詞＋名詞」の混在期間を経て、過剰生成の「の」が消えたと報告されている。また、この過剰生成がハングルからの転移である可能性については日本語獲得の際に起こった独自の現象と考えるのが適当であろうと述べ、母語からの影響を否定的に捉えている。その根拠としては、ハングルと日本語の統語構造が同じであること、ハングルでも修飾（形容詞）と非修飾（名詞）の間に音形要素が挿入されないことを挙げ、ハングルの構造を適用したならば、獲得の初期段階から「形容詞＋名詞」が発話されるはずであるのに最初に出現したのが「形容詞＋の＋名詞」のほうであったことを指摘している。この報告から、母語の影響を受けない場合でも「形容詞＋の＋名詞」の誤用が見られることがわかる。

ただ、ここで一つ気を付けなければならない点は、仮に母語の影響が考えられる場合でも、幼児では、その習得している言語について文法的に把握することは難しいと思われることである。自分の母語を文法的に把握できる大人の場合は母語の影響を受ける可能性が幼児よりも高いと考えられる。そのため、母語の影響について調査する場合には大人の学習者を対象とした調査が必要であろう。とはいえ、この白畑の報告は、学習者に誤用が観察されたからといって、それをすぐに母語の影響だと断定することはできないことを示唆しており、母語の影響と誤用の関連を調査する際には留意する必要がある。

3. 日本語の「の」と中国語の「的」

一般的には、対応する文法項目について学習者の母語と日本語との間に相違点があれば、教師はそれを誤りやすい点として学習者に指摘したり、注意を促したりしがちである。しかし、母語の影響と誤用との関連性が明らかになっていない段階でむやみに間違えやすいから気を付けるよう指導すると、却って相違点を強調してしまう結果にもなりかねない。効果的な指導を行うためには母語の影響と誤用の関連性を調べる必要がある。この章では「の」と「的」の相違点をまとめ、考えられる母語の影響を明らかにしておく。

以下は王（1984）が先行研究をまとめた「の」と「的」の対応関係である。

の	{	1) 格助詞	}	的
		2) 準体助詞		
		3) 並立助詞	}	無
		4) 終助詞		

このように、本稿で扱う1) 格助詞「の」は「的」と対応しているのであるが、さらに詳細に比較すると「的」は「の」よりも用法がずっとせまいとしている。

格助詞「の」	{	その他 ¹⁾	}	主格	}	無
				対象格		
				同格		
		連体格 ……………				的

つまり、格助詞としての「の」のうち連体修飾の場合のみ「的」と対応していることになる。これは先の姫野の1の用法と対応する。ただし、完全な対応かというとはそうではなく、日本語の「の」が何回も使えるのに対し、中国語の「的」は一つの成分の中で一回しか出ないと指摘している。

この「の」と「的」の出現回数の違いについては、水野（1993）がその相違点をまとめている。水野によると、2つの名詞を結ぶ場合は以下のabcの点で異なり、3つ以上の名詞を結ぶ場合はdの点で異なるという。説明をわかりやすくするため、abcdそれぞれに水野が用いている例を1例

ずつ付けておく。²⁾³⁾

- a 「名詞1 (的) 名詞2」において、名詞1が人称代名詞であり、名詞2が人間関係、団体や組織を表す語の場合には、普通“的”を用いない。

(4) 你 姐姐 是 昨天 来 的 吗？
アナタ オネエサン ハ…ダ キノウ クル トコロノ カ

- b 名詞2が方向や位置を表す語の場合、普通“的”を用いない。

(5) 小明 悄悄地 藏 在 他 后边。
シャオミン コツソリト カクレル ニ カレ ウシロ

- c 名詞1と名詞2が同格である場合、普通“的”を用いることができない。

(6) 会长 山田 先生
カイチョウ ヤマダ サン

- d 日本語の「の」は多数の名詞をつなぐことができるが、中国語では意味の結びつきの強さの度合いによって、結びつきの強いものから“的”を用いないで名詞と名詞を直接つなぐ形に変える必要がある。例えば(7)の中国語は(8)のようにするのが普通である。

(7) 小张 的 方案 的 内容
チョウサン ノ ブラン ノ ナイヨウ

(8) 小张 方案 的 内容
チョウサン ブラン ノ ナイヨウ

以上は、「の」があって「的」がない場合だが、その逆の場合もある。以下も水野による例である。

(9) 我 写 的 信
ワタシ カク トコロノ テガミ

(10) 孙先生 是 一个 谦虚 的 人
ソンサン ハ…ダ ヒトツ ケンキョ トコロノ ヒト

(9) (10) の中国語には「的」が用いられているが、日本語の構造としては(9)は「動詞＋名詞」、(10)は「形容動詞＋名詞」となり、「の」は入らない。(10)は日本語では「謙虚な人」であり、「の」ではなく「な」を用いるが、中国語では形容詞と形容動詞の区別がないため、(10)にも「的」が用いられる。「形容詞＋名詞」の場合も同様に「的」が入って「の」が入らない。これら構造上の違いの影響について姫野(1993)は日本語教育の立場から、以下のように述べている。

「の」の役割が強く意識され、必要のないところにまで使われることがある。特に中国語話者は「的」の影響か、この傾向が強い。早いうちに正しい形を習得しないと、「行くのため」「行くの時」というように形式名詞を核として表現する段階まで誤りを引きずることになりやすい。⁴⁾

以上の先行研究を総合すると、連体修飾に関して「の」と「的」には次の相違点があるといえる。

I 「の」は用いられるが「的」は用いられない場合

- 1) 2つの名詞を結ぶとき中国語では「的」を用いない場合がある。(水野のabc)
- 2) 一つの成分中に「的」は一つしか用いないので、「的」で結ぶ関係が複数ある場合は結びつきの強いものから「的」がなくなる。

II 「の」は用いられないが「的」は用いられる場合

- 1) 形容詞と名詞、動詞と名詞を結ぶとき、「の」は用いないが「的」は必要である。
- 2) 日本語では、形容動詞と名詞を結ぶとき、「の」ではなく「な」を用いるが、中国語では「的」を用いる。

I IIがそのまま誤用を促すとしたら、Iの場合は「あなたおねえさん」などのように必要な「の」を落としてしまい、IIの場合は「私を書くの手紙」などのように不必要な「の」を挿入してしまうことが考えられる。

このI IIについて、実際に学習者にはっきりした誤用の傾向が見られれば、中国語の影響が関与している可能性が高い。仮に誤用が観察されなかった場合は、連体修飾の「の」に関しては中国語の影響と誤用の関連性は低いと言えよう。

4. 調査方法

学習者が授業で口頭発表をした際にテープに録音し、それを文字化したものを調査の材料とした。今回調査したのは文科系学部2年生対象のクラスと工学系修士課程対象のクラスである。学部クラスでは2名、修士課程クラスでは3名の中国人留学生の発表を文字化し、「の」に関する誤用を調べた。5名とも日本語は上級レベルである。発表は予め与えられたテーマについて調べてきた内容とそれについての自分の意見を述べる形式で行い、発表時間は一人15分から20分であった。発表者には前に出て、他の受講者に向かって話してもらった。

5. 調査結果

以下(11)～(24)は学習者の誤用である。学部の2名を学部A、学部B、大学院の3名を大学院C、大学院D、大学院Eとして示すことにし、誤用は各学習者別にまとめた。

なお、発音については、学習者の発音が不正確であった場合でもここでは正しい表記を用いて記してある。

学部A

- (11) あなたの考えでは中流というのような生活はどんな水準な生活ですか。
- (12) 毎年1回ぐらい旅行に行く余裕があるの生活と答えた人は1名で、それで、日本人みたいの生活で中流と思った人は2名でした。
- (13) あなたの考えでは中流という生活ってどんな水準な生活って出したら、みんなそういう答え出ました。

学部B

「の」に関する誤用はなし。

大学院C

「の」に関する誤用はなし。

大学院D

- (14) このデータからはこのようなことわかりますのけれども、ま、一番多いのは、男性と女性は家庭の地位は同じという意見が一番多い。

大学院E

- (15) 中国人にとっては初めての教育全体に関わるの法律、総合的にの法律であります。
(16) あの、別の難しいの専攻分野の5年の場合もあります。
(17) 学部の医学部と、まあ、漢方に関する中華医学部、6年間も場合もありますが…
(18) あの、中国場合は3年間です。
(19) 今、ほとんどアメリカかたちで、まあ、教育していると思いが…
(20) まあ、有名の高校は入りにくいと思いが…
(21) 例えば、有名の高校とか、あの、有名の高校は重点高校…
(22) 若者にとって厳しいの競争と思いが…
(23) 自分好きの専門選んで…
(24) 将来就職しやすいの環境、いろいろ技術、身につけて、それを一生懸命勉強していると思いが…

6. 考 察

調査前は、恐らく先にまとめた相違点ⅠⅡに関する誤用が多いであろうと予測していた。ところが調査した5名中2名には「の」に関する誤用がまったく見られなかった。予め与えられたテーマについての発表だったため、5名全員が発表の原稿を用意してきており、事前に原稿の日本語をチェックすることや読む練習をすることが可能であったので、誤用数としては日常の会話で出現する場合よりも少なかったかもしれない。

この調査結果をみると、誤用数には明らかに個人差があり、中国人学習者にとって「の」は必ずしも誤りやすい項目だとは限らないことがわかる。誤用を個別に見ていったところ、中国語の「的」の影響以外に2つの点に気付いた。一つは(12)についてであり、(12)では「動詞+名詞」の構造が4ヵ所出現するが、そのうち「の」を過剰に挿入しているのは1ヵ所だけであることから、同じ構造でも正しい場合と間違える場合のあることがわかった。もう一つは、(11)の「中流というのような生活」についてであり、(13)の「中流という生活」では「の」が入っていないことから、(11)は学習者が「～ののような」を一つの表現として覚えているために生じた誤用だと推測できる。教師としては導入の際に「名詞+のような」だけでなく「動詞+のような」の形も十分練習をするよう配慮することが重要であろう。

次の表は「的」の影響と誤用の関連性をより明確にするため、誤用を種類別に分類してみたものである。表中の誤用欄には関連箇所のみ抜き出しておく。

誤用の種類	正しい構造	誤用	述べ誤用数
「の」の欠如	* 名詞の名詞	(18) 中国場合 (19) アメリカかたち	2
「の」の過剰	* 形容詞+名詞	(16) 難しいの専門分野 (22) 厳しいの競争 (24) 就職しやすいの環境	3
	* 動詞+名詞	(11) 中流というの <u>ような</u> 生活 (12) 余裕がある <u>の</u> 生活 (15) 関わる <u>の</u> 法律	3
	その他	(14) わかりますのけれども	1
形容動詞	* 形容動詞+名詞	(11) (13) 水準な生活 (12) 日本人みたい <u>の</u> 生活 (20) (21) 有名 <u>の</u> 高校 (23) 自分好き <u>の</u> 専門 (15) 総合的 <u>に</u> の法律	8 ⁵⁾
その他		(16) 専門分野 <u>の</u> 5年の場合 (17) 6年間も場合も	2

表中の*は先のⅠⅡの相違点に該当する項目である。

誤用は述べ19例観察されたが、やはり「の」と「的」の相違点と一致する誤用が目立った。「名詞+名詞」については今回2例観察されたが、そのうち(19)については「の」の誤りではなく「アメリカがた」を「アメリカかたち」と読んでしまった漢字の読み方の誤りの可能性もある。今回形容動詞の誤用が最も多く8例あったが、同じ誤りを繰り返し用いている場合には、「名詞」と「形容動詞」を間違えて覚えていると考えられる。この種の誤用が多い学習者には「名詞」と「形容動詞」の区別を正確に行うための練習が必要であろう。

7. むすび

今回の調査結果から、上級の学習者では母語の影響と誤用の関連性に個人差が見られることがわかった。このことから、教師が誤用を指導する場合は個別に行った方が効果的であると思われる。また、指導の際には次の3点を観察するとより学習者の問題点が明確になり、効果的な指導ができるであろう。

- 1) 「名詞の名詞」構造で「の」の欠如が見られないか。
- 2) 「形容詞+名詞」「動詞+名詞」構造で「の」が過剰に入らないか。
- 3) 形容動詞と名詞の区別が正確にできているか。

今回収集した誤用は、やはり「の」と「的」の相違点に関して現れたものが多く、誤用が観察される学習者の場合には中国語の影響との関連性が高いといえるであろう。ただ、今回調査した5名中2名は「の」に関する誤用がまったく観察されなかったことから、日本語学習の比較的早い

段階で母語の影響を解消することは可能であると考え。上級レベルの学習者で「の」に関する誤用が見られる場合には、1) 2) 3) すべてに誤用が見られるのかあるいは一部だけなのかを見極めた上で個別に指導する必要があるだろう。

注

- 1) 主格, 対象格, 同格の例。以下は王1984による。
主格: 農村でも, 交通の発達した地方はともかく, まだまだ無医村はたくさんあります。
対象格: 母親が死んだのは, まだ, あの子がおっばいの恋しい年ごろのことですてね。
同格: 家庭教師の高橋先生
- 2) 水野は例文にピンインと日本語訳も付けているが本稿では割愛させていただいた。
- 3) 水野は「中国語で“的”を用いない場合」を一つの章にまとめているが, この章とは別の章で説明されている用法があるので以下に付け加えておく。
指示詞, 数量詞が限定的に名詞を修飾する場合
三个 小孩儿
ミッツ コドモ
三人の子供
- 4) 姫野 (1993) p. 94
- 5) (21) に同じ誤用が2箇所あるため述べ数が8となる。

参考文献

- 王海清 (1984) 「『の』と『的』の対応について」『日本語教育研究論纂』2 国際交流基金
白畑和彦 (1993) 「幼児の第2言語としての日本語獲得と『ノ』の過剰生成—韓国人幼児の縦断研究—」『日本語教育』81
姫野昌子 (1993) 「日本語教育における『の』の指導」『日本語学』vol. 12 明治書院
馮富榮 (1999) 『日本語学習における母語の影響』 風間書房
水野義道 (1993) 「日本語『の』と中国語“的”」『日本語学』vol. 12 明治書院
楊凱榮 (1997) 「『V的N』における已然と非已然」『中国語学論文集』 東方書店